

個人研究費

雲英末雄

58-2043

個人研究

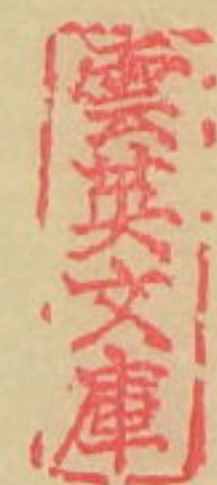
雲英末雄

58- 2043

叢話錄

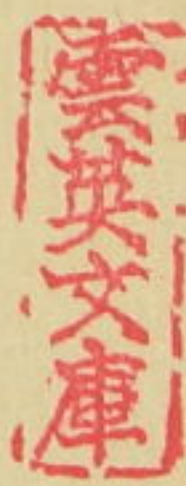
中綴

第一



自  
子  
天  
村

叢話録



中燬

有等子及天定の事 村任

星一白のむら子及

首のたつておとせぬむら子

退く子千子と成強存感書

○宝曆五、亥八月十七日富奥

白、廬、移、下、志、の、か、さ、り、也

おもしろい事ありし一、幕、の、那

お、あ、て、字、通、り、の、ハ

尺、離、れ、又、抱、り、や、松、の、月

○中燬 蝕後五更子至居光ら

依以密平唱

人、の、人、松、の、お、の、賀、皇、子

万歳業 賀皇息、二、日、出、夜、の、業

延喜十六年御笑、<sup>ヨコユク</sup>賀皇と云

御記、お、也、王、の、息、と、賀皇と云

○昔、時、庵、人、東、武、の、渭、北、河、宗、亥、卯、月

十一日、於、馬、嶽、五、十二、追、悔、短、尺、書、て

下、り、ぬ、予、年、の、時、毎、に、御、話、を、後、も

歩、坂、を、<sup>ヨコユク</sup>御、奥、物、も、出、金、を、<sup>ヨコユク</sup>御、

飛んで在りしは夜。瓜熟

。伏て不世志

ア、家也南無阿弥陀佛水乃月

。柿本宮女廣弟女大和治馳

任は此れし奢者ハソノ

。有柄山采窓

乃月也志人得より松乃

丹七

玉也此れあることふちの

我生れ矢もいつくおの

あしにくしつおの

。右地倉右府の家集

村酒

朝のやちわつて華乃夕十哉

。上ノや大印もあても感

云はてしあるも此

免

十有五ゆてい男こつ

後月

朝の葉好の尾の院の御月

秀鏡

月と己谷

狸見

鐘をよくおめん

舎榎

尺訓川

冥乃やの

立燐

老をちやたの中

悔乃

免

冥乃やの

立燐

老をちやたの中

悔乃

免

月と云ふ一ちあつたつらつら  
鐘と云ふ一ちあつたつらつら

狸足  
舎標

冥のやうな色に緑多う頬より

立燐

老をたやたの中へ悔りけ

残葉

惟子あやあより起りうすもあま

元暑

草花雑やあまの故もたつらつら

苦楸

花もあやあより起りうすもあま

後つもの羽もあつたつらつら

龍先の花結ぶや初めはあ

あやあより起りうすもあま

○聖廟奉納の梅

幾事しほ梅のさし梅て坤空

花の散るも待てそそ花奉り鐘

地上は後ひきとて花もあれし

兼陵斜日紅沈時重了岸

遠山翠聳肩 右桃溪句

燕尾

あやあより起りうすもあま

冬 全 村 立 立 立 免 炭

良東

月夜は区一輪力方極成 是

翠月夜石を留別

頃々小実行ハ行探合飲の志 全

後月

名月や仙らとてハ 海 全

跨入々木曾海道ハ月見哉 南河

舎持

今やハハハ後の君子よ月見毎 是

名月は光

清もハ文科科の事ハ 是

八朝

村徑

ハ歌や梅小分は笑もあハ 是

今おあハハハハハハハハハハ 是

名月は光

すのあハハハハハハハハハハ 是

強離

常盤月や又深山木は離ハ 全

ハハハハハハハハハハハハハハ 全

神考ら茶もハハハハハハハハハ 是

暗ハハハハハハハハハハハハハ 是

年内立春

年ハハハハハハハハハハハハハ 是

古川此の末ハハハハハハハハハ 是

古歌あり 福原



秋老りる葉もさうしけし月か見たり 秀境  
 晴るは好む人といふ人自人ふの法

年内立春

年ふきい田つく花は二社

拾川

吉歌あり  
 古歌あり  
 梨の花東ぬといふは社  
 毎月の夜藤山より藤原若年  
 原ふや斐見川よ交る無川  
 舞臺の流もよよ梅乃花  
 五平の月の夜はや川  
 田のそこの記は中宿 高松 高松

高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松  
 高松 高松

藤乃の夜はや川  
 藤乃の流もよよ梅乃花  
 五平の月の夜はや川  
 田のそこの記は中宿 高松 高松  
 藤乃の夜はや川  
 藤乃の流もよよ梅乃花  
 五平の月の夜はや川  
 田のそこの記は中宿 高松 高松

秋は別や周之旦の一夜就

寿屋  
 高松  
 高松  
 高松  
 高松  
 高松  
 高松  
 高松  
 高松

叢

海かなり来り強くや玉女一統

。尾花狐之延画 探信筆

御讚有柄川幸仁親王

人も足はあふさし 老狐

いともさるるも 奥上りの文白

フニソウシモ十四トイフニヤバカテハナイカ  
イヤダしくトフ、フシタヤダモラ、ダモ  
イハセバコソウ骨ピフフカニヘテ

。利休辞世頌

人生七十力圍希吐

吾這宝劔祖佛共殺

我待是是れ一丁太刀

いまの時にて手投し

天正十九年二月十八日 切腹

中條 徐告

名りや吹く御城の方山松

春真

竹一はあやうやあやう

春日

蟬のちんちん音耳石の音至

五

セリ

年尼佛とての志しやあせり夜

権佛

炭

何れも世をなす女ありては友  
生

夏日

蟬の声も八月の暮るるに  
生

七夕

年厄佛とての志しき夕七の夜  
生

権佛

生

形は仏乃ち女むす樹

丹玉既に

生

賣也しるも音早に志す孤

生

降りてし定まつ未だれ有

蒲団の足

○金、銘、名取川ト云ハ

みちのへりてしるは海流川此等代也

此古歌三五圖繪の生りし所讀人不知

さうりてしるは海流川此等代也

○上、之、人、守、護

△慎而任而使無詩

中原巴流老傳く元來韓信の語也

中條至る信光

尺の懸てしるは海流川此等代也

信光の老傳く元來韓信の語也

画ハ無聲詩

詩ハ有聲画

○郭公より張月と画一と云

画二ハ出湖と人こ

兵庫隊羽段の

倚<sub>カ</sub>と云ふを画<sub>カ</sub>と云ふを

珠光と云ふ茶人の杖桑

茶湯の社也

南都称名寺僧京都出傳茶湯人

○十二月十五。荒陵山の隱僧

天王寺

村徑

○九月十七夜に至る

瓜の瓜

斤<sub>ハ</sub>瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

瓜の瓜

仲礼  
土風

村徑

○世説々々名謚皇甫士安古事  
瓜へ一或書瓜をいす

初雪や山崎殿の流屋形

初名お慶として遊ぶ小橋の那 仲礼  
土風

○世説に名謚 皇甫士安古事  
あへて或書に...  
草とたうし慶に遊び...

初雪や山崎殿の流る屋形 夏

○江戸より本宮殿と登伏尺驛  
極嘆くや本宮殿の今更もつとれ那 村徑

○達六ッ日画讃して一軸...  
急翁 殆く清水佑存...  
浪座中村風竹の友...  
昭和二年の齡八十歳より右に画讃の  
子ハ需辞...

遠くを才一か... 眼の那 全

○コボリ口... 茶店の人  
と集りて... 唯失り地...  
兵よ花... 友も...

地獄... 杜若 全

○雑續古今雜下談諧哥 清輔  
大原... 友...

○異名教... 一雨... 全  
ゆ... 全  
夕... 加茂の末 全

○愚長仲禮と連く梅間の  
川道は遊ふ自法光し  
村智

不知夜やちまれば厚し  
○光廣の夜梅は詠  
と梅のう

梅ちみあし  
物のもよみ  
語絶す

祭の言の使  
梅夜  
夜の白く

梅夜  
○王照君の詠は  
村智

○八啼の歌は  
梅夜

○杜子美 語不盡  
人死不休  
梅夜

梅夜  
衣笠内大臣

梅夜  
村智

梅夜  
村智

梅夜  
村智

梅夜  
村智

竹の葉をよみてはゆらぎの山は我れあり  
石懸云ふとては石懸若くは石懸の急  
涼凡起るる急は佳境なり

村江

書あはれ別色とては下この急  
此佳

○石懸れぬとては急の急なり

日一松の枯道とては急なり  
村江

初とては急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

○訪果人不遇

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

○當れ急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

急なりとては急なり  
急なりとては急なり

山菜茹や人の人下なる一夜書

村任

山菜茹の自注書し先年加亭

一箇世人の心やこゝろ家記

山菜茹の自注書し先年加亭

信得舎石鐘の庭に松一木と

世上老松本何れに朝の

早拍子すくく海を渡る

石鐘

下畧

南都の行々々々々々々々

くゆやたかおのり長生立

村任

六月廿九日狸兄弟の七回忌孫馬立

豆飯の夜のうらやまの光

省伯也

空みと成てんじ世やく代秋乃月

御製

早庭かへりうらやまの光

右林系子并記 物志

名目や東すのり

鬼貫

名目や世と共うる

箱

名目や柳乃ゆのり

其角

名目や松のり

法

名目やいづれか松

村任

名目やあしはるる音

立

五楓

斤換らぬものもあはれ

其角



名月也柳乃竹のてんてん  
名月也松乃竹のてんてん  
名月也松乃竹のてんてん

其角  
法

名月也松乃竹のてんてん  
名月也松乃竹のてんてん

村位  
立

五楓

斤統ら教女のてんてん

其角

牛もすけ井茶道は後日松か

山雪

入相乃あし女怒るてんてん

湖照

川上ハ鶉のてんてん

石鏡

中く女周るも夢乃てんてん

村位

一陽れ浮く松乃てんてん

後

巴流

咽乃乃志のてんてん

村位

十月念三日拂曉

大根乃つらつと佳一 朝日和

石鏡  
四列

斤統ら教女のてんてん

前

梅乃乃乃のてんてん

生果乃握つてんてん

名月也松乃竹のてんてん

寒菊七よりのてんてん

其角  
石雪  
村位

五楓  
五楓

六朝

予の少時まゝぬ山初さく

畚園

。西洞院下を賣上、春要奇を

訪、年久、杜絶、何と

終勤地一併

正、扶、く、く、も、う、し、梅、の、心、を、

村徑

。明和壬辰正月石録伎後の巻

百口のつははきま湯やうく

伎後、ひ、得、り、り

柀、の、梅、又、馴、染、く、日、十、南、茂

石録

は、向、上、を、ア、リ、テ、也、留、し、何、や、か、

石録、河、宗、の、行、年、三、十、八、実、し、る、を、余、よ、よ、て、  
世、乃、ハ、二、つ、坊、て、當、田、甚、四、十、文、と、云、

五、秋、有、喚、け、後、三、

産、を、か、始、乃、中、に、梅、の、心、を、

常、多、を、び、尺、ぬ、又、日、れ、文、を、お、が、

蓬、磨、り、し、ら、む、子、ノ、韻

分、る、も、つ、く、ん、も、若、れ、何、と、云、

南部、千、手、服、子、  
伏、名、丸、や、助、名

お、ゆ、く、ら、人、の、さ、ら、れ、由、所、を、

た、く、と、ち、を、能、そ、う、や、後、の、け、

額

溪、月、ノ、二、字

本庵豊藏坊二師の字讀

得て共電、号、

千、手、服、子

八、お、初、か、初、子、道、き、宇、此、八、傷、の、く、手、活、け、た、也、月、を、

七、う、ね、一、

ふらふらもつらんもあはれに...  
依名北や勅表

おぬくし御あ、溪  
たつとちよれそつわ後のけ

額 溪月 ノニ字

本庵豊蔵坊二師の字讀  
得て卷号  
言解子

八家流が教子進き宇治の傷あつて流したれ月

七うね、一

大元と其あ才の袖もつねま吸ふも風ふふせ

或人もつねあ、母、字よして押...  
右ノ哥い...  
十二又子ノ也...  
哥、まあ命し...  
玉吸むも...  
あしいで...  
うへ...  
ね印...  
むと智

梅瓶あやめん 菊れ日ころり 清きもつね  
と界秋  
村位

く控と習も山差山我...  
と界秋  
三

於送...  
引くも...  
あはれ...  
あはれ...

梅詞...  
石鏡...  
心とま...

ふらふらもつらんもあはれに...

石鏡庵主 秋阿母 此短尺 けし  
けし けし けし 社中各く 詠よめす

ころる時 夏をて 実をて ちる ちる ちる  
斤町や 曲しす なるも ちの 涼も 哉  
村名

土佐日記の 祭場よ ねももす けし  
り記し けし けし けし けし けし  
ちり けし けし けし けし けし  
生れ けし けし けし けし けし

追悼

圓光茶道 悟信士 至る 信友 けし  
の けし けし けし けし けし  
の けし けし けし けし けし

抱ひ けし けし けし 極乃 駕 昔 哉  
立

李太白 長安 一斤 月 唱  
劉伶 幕天 席地 けし けし けし

葛花 香や あり 涼も 乃 斤 月 夜  
立

文章 人 けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし

村名 人の 鹿 けし けし けし けし けし  
原氏 けし けし けし けし けし  
花 けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし  
けし けし けし けし けし

る けし けし けし けし けし 集乃 主  
文鏡

秋 探頭 各 寄 月 太鼓 哉  
村名

捨子 葉 けし けし けし けし けし  
立  
飛蝶

村位と人の鹿が皆既感して行ぬれ  
原氏との区別をききしるもさしぬるも亦るの  
花もさきくしるるもさしぬるも亦るの  
花もさきくしるるもさしぬるも亦るの  
花もさきくしるるもさしぬるも亦るの

文竟

ふりくみ麻とちやるに華乃主

村位

ハカ十の造り道達 太鼓哉

全

探頭各寄月

捨子 葉ぬが 足拾うらう 乳

飛蝶

聖王 月照るや 昔の秋の 祈る

如柙

狐登 正位忌みて 旧の月

石鯨

任使 根んぬ 秋の月

村位

後月ハ黄昏より 暮るし 不  
常中ハ 暮るし 暮るし 暮るし  
任し 暮るし

任す 近十方地 神の月

楓翠や して 秋の月  
たて 楓翠や して 秋の月  
海院の 楓翠や して 秋の月  
今一 楓翠や して 秋の月

全

月ぬ 松千 夜乃 生佛

楓翠

哈 千 たり 終て 又 暮るし 月

村位

淡香 得下 向の 秋の月

楓翠

升 費入、と 有毎 秋の月  
暮るし 楓翠や して 秋の月  
道合 師の 暮るし 楓翠や して 秋の月  
原氏子 暮るし 楓翠や して 秋の月

神々月古編く仰人よ

村位

舞甲中人琴奏と改名を賀ス

よふたふそ目負く

目負く竹松の吳名茶

松高風破旅人夢

○皇月念五の境奈句

く均サス人とかん

親よも竹井強玉幸

○卯霜の念六廿田氏新定

一袖と娘

えりれ一番名の流文

古詩曰天台山上醉仙桃

みくまはかまも権乃白し

○唯職論也 未得真覺恒處

夢中故佛説焉

卯の夜やうもハるま

右ハ石鏡居士の牌前

観月良園信士五力八日五十九歳

蓮の吹やうは白法乃福の神

光る

藩う癖人を統く

村位

は白の三師協照二句より

終上五取

卯のしるし 生れ長夜  
八のちまてとて歳

右ハ石録居士の牌前、信りあり公畧  
観月良圓信士五十九歳して卒  
六のちまて五七日ありりや西遊てのち向  
蓮のつゆいふは法乃福の神

かみ

藩のう 癖人をたはしくれ異かて歳

は向は師佛照二の句より法とて葉  
して神五たしくとをて葉しりあ  
終は上と叶てしてわ子にまてく  
まては三十五年朱子葉して海上と  
星我自らかぬ上皇下下力長一統の  
あつとていふつ法乃福のちまて

加貝

画師西山敬信の写幹と

六のちまてはたなまをり一乃甚

京師智貞尼公は八百廿五

百のちまて道とてくは八を極  
小節氏の妙意尼公の稀齡をた

りてはちやんをたひて百廿五

言弗何宗は身以て法

正乃ちまてわ川とる子も

夜毎を上宗宗合部中の

誰とてはたけり一をれ極

く変ぬ人俄か免ち宮の内依  
神乃のたけりくとも未だ後

神乃の日本祝語と大切なり

峯園河宗の病師を病す  
轉車してんが能く年齢  
ふらぬきは二そ九と  
いふまゝと云ふは其の

華好うらう〜 胃亦乃あは

村徑

二句を氣中入りし載きて  
受納を〜とて時よと  
十八日し翌十九日曉を入りて  
ひら〜たり〜と魯堂より  
使を身して氣入り

秋の着

秋山老れ山〜 霞を山ト云ト  
追々の境山ヲ秋を山ト云ト

○面ヲ誅言ぬ〜 詠言的中の句

乙〜とぬ 鳥の浮雲を人〜  
井の柳よ〜と 相り一〜  
去〜家よ宿〜 柳〜  
ふい山のふ〜と 暁の光  
去白ゆ〜 秋活の〜  
涼〜と 羊れ〜  
却る乃二〜と あり〜  
○人〜と あり〜  
○穴躬キウハテキウハテ 窮も〜作は非〜俗〜キウの字、本文文字

月ニ無穴躬ノ感アリ

此齋山〜 鳥丸光廣々

神あり〜と あり〜

○於天之喜早〜と 今〜と せり〜  
餘枚抄仲磨ノ註出



如るの二つありてはあけりて  
 一人と道りてくらわぬの  
 成かいつの體れぬあはれ  
 〇穴躬キウハテ 窮キウを三作、非俗キウの字、本文キウ字  
 〇杖灯庵  
 〇穴躬キウハテ 窮キウを三作、非俗キウの字、本文キウ字

月ニ無穴躬ノ感アリ  
 比叡山ヒエ 鳥丸光廣トウマルミツヒロ

神カミありえんカミありしカミ  
 けしきのやあれあぬの

〇控天ヒ之喜早ヒ云ハ今ヒの多ヒとせり白ヒ  
 餘枚抄仲鷹ノ註出

〇秋アキ考カウ尾冷ビ霜シユウ花重ハナシヅメ古詩コシ  
 〇葵アヅキのアヅキ心ココロ

重陽シユウヤウ 村住ムラジ

菊キクハ咲サキ人ヒトハ夜ヨもモ情ナリりリ

二月念ニ九ニ奥村教順ウチムラキウノリを人ヒトと  
 流ナリひヒ糸イト齡ナリをヒ行ユク石イシ無ナシ

壽スとスやヤあアるル柳ヤナギ乃ナリ友トモ也ナリ

〇京師岩田氏の六十一シヨウシイワタノウヂノロクジウイチ此齡コノイダシとト賀ガ  
 〇のノかカ安永アズキのノ甲カウ午ウ二月ニ月ツキ  
 〇かカ早ハヤ短ミダシ人ヒトをヒ事コトてテ娘ムスメ

生ナマ垣カキ乃ナリとトまマをヒ地チとト人ヒト哉ナリ

〇右ミダリもモ人ヒトのノ名ナ迹ト四月シツグチ十六ジュウロク日ニチにニ  
 〇愚オロシ也ナリ仲禮ナカレハ日ヒ画エしてシテ壽ス老人ロウジンのノ  
 〇一ヒト軸テ

〇神カミをヒ月ツキ十ジュウ日ニチにニ造ツクリ迎ムカヒとト

〇杉スギぬヌ八ヤチ日ニチにニさサるル由ユ味ミ乃ナリ行ユク時トキ人ヒト也ナリ

豊後の別用河原吾向門ちり  
久通子不也号敏く隔し黄泉の  
容しつる今しつて七回ちり  
追言集れ撰者より句とをり  
尺そら道の心向云家や都正  
村徑

未土月十日巳午れ子、杏線、舎兄  
春雄、アトとこり連して寂秘  
若る麦切めく、よすりて昂  
一、  
右短冊、吾研く人、  
哲、  
大言と吐くは道の真宗、  
外、  
不、  
毎、

雪よのこほり色、  
侍、  
中、  
五、  
あ、  
二、  
二、  
二、

秋情

あふれ葉のこいも休や 秋乃内 落札  
そとに海石吉、  
世とこやせ、  
。人自負れ白夜梅  
。火のち能伽羅の梅  
村

侍有りや民ハ十のれおいこし 落札

中庭 五串片は良豆腐ら祇を隈つき夜 春巾

ありやちりや 二白一字畧岩雪嶺世引  
二葉止一葉ちり風のうへ岩雪

秋情

あふれ葉のこいも休や 秋乃内 落札

世にやせし 世にやせし 世にやせし

。一人自足れと夜梅

あふれ葉のこいも休や 村位

あふれ葉のこいも休や 富叟曰ズバの出葉至て感あり

春宵一刻價五万金云々

又南家曰 人の句一 世世人巻て

村に冬夜さく 村に冬夜さく

石にありの朱忘 擲て

夜に發て 夜に發て

胸中へ吞て 胸中へ吞て

字水八記亥之月念ハ我村位 小館と

。青山庵主、一行投す 山彦のこ

高の年入使者 高の年入使者

川乃口可ぬあけ 小館哉 琴来

愚者のワキ... 禮を謝す。

葵の酢が苦なり 同も春

山

○古人云申れても... 切とぬ句あり

ち切... の人相互... 當をく

難陳... する... 迎

めらん... 云難の

矣句... 有物

の... 人

人... 暴

い... 根

三光... 句

信... 我

友の花... 我

い... 我

寺... 我

な... 我

を... 我

自... 我

子... 我

我... 我

自... 我

乃... 我

○暴... 意

○定... 意

い... 意

師... 意

○行... 意

師... 意

自棄の字義我はのあつめたる 自棄を教はすべからず訓をて  
孟子出たり自棄を自棄を教はすべからず訓をて  
我は中しつららんのしんがいは教はすべからず訓をて  
ナキト云て字をハハミシラバ自棄をヤリタイエ  
自棄と云ハ能キ教と述はルモ必ズゴトキハ  
及ビ中しつららんと我身を棄すらんにシテス  
○暴は極悪としてメクナル意之を狼藉とする

○定めめづの歌子は行ハハハの様にして  
しらぬはけさる秋も急ぎますま  
あをとととの喜ぬく風  
イセ物作らる屋吹はる菊の花咲き奇しくそ  
よみのさるり

師説 ○行吉とハハハの様にして不常とする  
こしのこととの秋説く国冬と詠と訓ハ別書記

### ○探を風第は麦也

水々日々や風一流を中ハハハハ

此句我詠友の詠に借はるる一文字ありて之を  
竊り取て云一流一文字ありて之を  
先達もその文やまのれ中よめし  
誠なり今作趣向として後判は  
一字を以て二句不延この後すも  
くさるる探のこは自更へ入る  
いさかきのはれは句

いさかきや吹平流にト  
あはらうと吹心あり流あり趣向と  
いさかきと吹心あり流あり趣向と  
いさかきと吹心あり流あり趣向と  
いさかきと吹心あり流あり趣向と

いさかきや志しりしこの弥陀乃國  
右ノ句は棋北流半え而句合半扱作者不知  
いさかきや志しりしこの彌陀乃國  
右ノ句は棋北流半え而句合半扱作者不知

古枯

おうしれゆく白きしり師走哉

棋北より来し与合の古括

○亥のやし大小

大小師走の如鼓乃神音也

夕ホホ夕ホホ

夕ホ夕ホ

右夕ら大ホら小也

又御舟足ぬ杓を師走乃志の如 村徑

有扁大無扁小

儉約三年朝夕茶漬粥 作者不知

豆飯輕茶

此歳花名之吟

南紀里白翁

我忘と枝志捨り年忘也

二句一字畧ハ宛雪を削し

多下りの舟も多足は先達あり

誠より里白老の如く又本有れ

年忘也

探題 稲妻

やんばあつちの如し 園九 健

此句或宗道れり信方中日派此宗道

香の節にいふくはのり色ハ拉鬼神と

部と括しきしるる也

の時ハ類ハ倍の宗道云

は法いふに不依て

そのれもよるは

白降海ぬり

誠より里白老の... 又亦...  
字... 山...

探題 稲妻

老... 國九 健

此句或字道れ... 信方... 旅北宗道

香... 探... 依... 依... 又丈...

探題 孤村

人... 探...

立老將花軍

概... 探... 又探...

又探題 寄名所恋

留... 探... 探...

探題 寄菜恋

偷... 探... 探...

立 鯨

探... 探... 探...

未読めらふ朱筆さすものく  
伏て不過ぎを

清

了、家持南無阿弥陀佛の如月  
は白撰の... 文を一つも  
可成くして... 概す

其角

文七冊あゆらふ庭乃の...  
は白ノ二と白ノと... 技本集あり  
上と斗き角ノ作... 我の  
此... 古今集ノ物  
此... 後  
酒... 詞... 切... 解... 一字

其角

あいせ... 探... 見... 此... 後... 准之

連歌

十年... 見... 此... 後... 准之

第祇

誹諧

見... 此... 後... 准之

芭蕉

巳亥の

天中節

村徑

八剎... 依て御... 代別

文... 武野燭談... 神君八月朔日於

妙吉例... 依て御... 代別... 八剎... 賀... 記... 是... 師事... 出... あり

法... 村説... あり





▲茶花の異名として川京山吹トリッル  
之ハ烏丸光廣ノ光栄云ハ詠歌ト

ハカクハ人川京山吹トリッル

セノ井ノ人川京山吹トリッル

右ハ靈元院孫勅定ト異名トカ

ク世ノ強クシテリノ事説キ

師答曰右ノクハ小弁口ノ後

トリッルト堂トシテ一向ノハ

ナクナルトシテ證據ト出ス

○烏丸光栄云家集ニヤハ

卯月四ノ式部ノ宮 京極家仁親王桂ノ

別殿ノ之ヲ茶花ト云フト千里黄金ト

云フト何ノ一音可也ト 宮作ト小

此花トシテハ人ト云フトト辨人ト云

ハハト云フトト云フトト云フト

クハハト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

ト云フトト云フトト云フトト云フト

一トセノ月ノ光ノ圓分寺ハ

ト云フトト云フトト云フトト云フト

村徑

古ノ日ノ穂ト云フト

種ノ花

茶花ト云フトト云フトト云フトト云フト

母長ハ予ハ...  
 予ハ予ハ...  
 予ハ予ハ...  
 予ハ予ハ...  
 予ハ予ハ...

一 色如月... 先回分寺、  
 まさるるの...

古みらむ日れ穂... 種乃花 村徑

葉は物あふ先... 種乃花  
 種乃花ハ作... 毎朝

一 女... 衣...

此名装束... 深...  
 装束未、深...

一 女... 退紅...

先ハ...  
 先ハ...

先ハ...

一 山吹... 西黄...

保氏若... 右日記

一 花山吹... 西黄...

一 女... 深...

証... 深...

一 小... 為... 田... 福... 足... 福...

神... 見... 和...

一 契冲辞世 二首

やうしてはのひれ門を出入り  
燈籠をいりしりしとちり  
人よ人あゝやとほの秋さく  
名もなきはきりしひのり

中秋 至て月光

夜を志日午 夜を志日午 雪を花 雪を花 宵中 宵中

は一吹りあり字ぬきく名りれ  
蕉の霜 鬼費もは作削あり

与也白川  
一月の桂の華 桂の花 してこ

久しお月の桂の花や咲くはと吾之の傳り  
出よとてはとれ一切の實ちり本の花は  
咲く詩の月と桂は一字を我と我と我  
他と桂の實も桂も是より桂のさ  
み便して詩人の諺みすんじ吾朝の吾仙の  
詠多と於五詩の法と奇なり可なり  
いし他の月も桂も桂の實のり吾之の  
吾と桂の實も桂も桂の實のり吾之の  
詩も詩の月と桂は一字を我と我と我  
他と桂の實も桂も桂の實のり吾之の  
詠多と於五詩の法と奇なり可なり  
いし他の月も桂も桂の實のり吾之の  
吾と桂の實も桂も桂の實のり吾之の

一心の花 春に心花に桂也

一 詞の花 似よの花は去るは心花なり  
人の心も去るは去るは心花なり  
人の心も去るは去るは心花なり  
人の心も去るは去るは心花なり  
人の心も去るは去るは心花なり

おなわ道せり新式は去るは心花なり

右三点の註は御筆は尺こ 口傳云初も花は

一派春はすりこのとわも  
師説し 庶は書あり云は心花なり  
庶は書あり云は心花なり

李竹笑

一 心の気 春は花を極めたる  
一 詞の氣 似てよしの花を極めたる  
人の心も云なきに立やうれしくや 古より  
人の心も云なきに立やうれしくや 古より  
人の心も云なきに立やうれしくや 古より  
人の心も云なきに立やうれしくや 古より  
人の心も云なきに立やうれしくや 古より

おなわ道せり新式はまよあはれとあまて  
行れ宵寝ふ不可及 口傳云初も花すれ  
右三点の註は御筆に及ぶ 口傳云初も花すれ

一派春よりこのよもを平し  
師説し 庶ハ書あるよよ云ハ意ハ  
庶もつりふとりの意ハあはれ餘ハ  
庶もつりふとりの意ハあはれ餘ハ

一 御筆の註は石の氣も月めらり  
一 石の氣 月の氣も月めらり  
御筆の註は石の氣も月めらり  
御筆の註は石の氣も月めらり

右五点の分は或人此の答めしを採る

一 かのあはれ和歌のたはら 廿一代佳歌

中よ之首 六家集の中よ十首

原氏物語の中よ一首 教合十四首

別巻よ詳し 他し古今集ハ二首  
あはれしあはれし一首 ちよひしあはれ

同のたはら先とちよひのト  
か留とちよひあはれ 誦讀此及元句も  
古摺れ作例よき 予 先年門中  
か留傳はけり ければ思おろ 中條  
清光らるれば

新傳ゆり今物へ意と 朝臣の  
かあはれし 和歌れか留とて 新集

かあはれし 和歌れか留とて 新集

いせの海大和船... 先右十四首... 言

一の留及... 別記

狂言謹

Main handwritten text with musical notation (dots and triangles) and vertical columns of characters.

一松花... 連歌

至寶... 詠

一... 雄

八... 文

どぶがとくさるゝ  
神りそ操  
しそ月有はて  
の

一 桜花よりて正き花めちりて連歌

至寶抄も出たり 誦詠のりち

一 一さ確めて其の角坊

抄解者文覚我をいひせり

おまじいといへてもみらばいひ費しり

遠藤武者成盛遠はし十八して深了らば  
あがむしし手と殺らばいひせり  
かきの頸と切り小鷲もいひて出家引く名は  
文覚といひしはちり抄もいひせり  
解らばいひせり

一 源順八月十七夜の歌

いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは

一 山家集

いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは  
いふゆゑにわたりたかきしむるわれは

楊子

魚亮

いふゆゑにわたりたかきしむるわれは

京師岩前らるるゆらぎ

風鈴はつて告り雪は曉

村任

○鸚鵡山庄以後花辞世

以後

死ハ生ののろし死を法也

花辞葉

右雜く定家への

しん後せばそれも紅葉も

花の葉の枯ハは涼しむ思ふにせりこころ

白一せし後せばのこも似かす人し

花の葉のこころを思ひしは念にもは覺

たりしはこころを思ひしは念にもは覺

たしく思心如佛と観念をこころに

はとそそぐそそぐと懐くはこころ

右足立時昌と人自りあり

は涼しむとつらとつらとつら

○後花辞小禅心追善

橋乃りおちて墨は涼

一掃

昔もむつらつ小橋分り橋

波昌

ふ小止む一かゝる庭うち飛

汝危

下畧

○一時軒随筆の内也

菊とりの字音ハ和歌にも涼もあそび

の花とりの字音ハ和歌にも涼もあそび

如此文を電と人らと扱筆しては遠大

コトが秘記よ人丸の詠

菊ノ異名れ中ニ菊ハ秋ノ花

後ハ秋ノ花ハ秋ノ花ハ秋ノ花

花ハ秋ノ花ハ秋ノ花ハ秋ノ花

花ハ秋ノ花ハ秋ノ花ハ秋ノ花





重阳

楓も極すんふもあけり雛の菊

行年七十二 叟 棋北

十之夜又至て清光

立

くはくはなほし見世相

是立 岐昌

中庭 東光蘭若の枝

別号朝四樓云

疑ふ松の根

表和

花下儘てみ流る水れ初を

清和

河の流るるもあけり

灌佛

此四月二十日

立

右白字の換り

判

白めの村刻

立

白めの村刻

立

白めの村刻

セリ

白めの村刻

白めの村刻

白めの村刻

白めの村刻

梅屋敷の...  
白めりの...  
立 立 立

セリ  
宮中...  
夕...  
ふ...  
ク...  
立

安永八亥菊月十八日秘記の註...  
一掃

腐...  
立

中...  
村

あ...  
立

廣...  
立

安永...  
立

枯...  
立

○...  
明和六年...  
冷...  
立

○ 我名余じ白ヨミ入る盤解、後歌の歌と作例と  
別書に詳し

△ みねの粟もよし 翠平江 如丸 其角 一品  
國 兩 此五吟詠語

○ 卷の白丸 如くは海の如く此國兩とあり

如此名を白丸とてあふとすくはるる集  
乃一格とするは思ふもすくはるる  
心く強し四人、あはれ云ぬ

○ 乞ふたりふも 富亮詞案と云捨る此の  
時 卷の白丸

あて天は 一と云ふは  
として名を不中思ふは 一と云ふは  
るれと集あはるあはるは 一と云ふは

○ 更衣おはば 如くは朝  
平丸物御題有伴と云ふは 一と云ふは

中旗毎月

合 飲也 夏幾夜と云ふは 一と云ふは

あしは けの 盤と云ふは 一と云ふは 村徑

桂りやあはれと云ふは 一と云ふは 一と云ふは  
盤 夜

あはれ 打ちの 氣と云ふは 一と云ふは 一と云ふは

○ 十月十日の 桂の 裡御當座

依 勅 鳥丸 友、 亦し 歌

仰 出されし 一と云ふは 一と云ふは

一と云ふは

一と云ふは

一と云ふは

おひら

桂のやうにうらぶれぬし廿

三

熊夜

あつたの気はあつたの氣はあつた

三

○十月十日の桂の裡御當座

依 勅鳥丸友、立し歌

仰せられし山邊院の

てうりち

立書

光原

りのそはたはりほきし

るるひらるるをきやうん

手はう法後と冷らぬ

少祝し

お村

いけねのちも

いけのまを

光原

いけいけいけいけい

いけいけいけいけい

○今上聖主御製

鳳皇の御座られし

なほの御座られし

なかの御座られし

なほの御座られし

すべし其文心忠儀

のあつらひのせりのは後よこらつれ何ぞ  
世人をく此歎と傳て久しく此  
久しくあつらんといふの細かなる  
ほつとてしあまふれよとて  
代々子孫人とのひあはらむ

ゆき屋をよむ

水戸寄あり、仰あはれ御歎の枝  
あまふらんといふの細かなる  
久しくあつらんといふの細かなる  
御お衣あらむらんといふの細かなる  
清感のこころをよむ  
勅申と傳へしとてあつらんといふ  
けしきつらて傳へしとてあつらんといふ  
そつとつたつた

和月申田田帝城と遊して東大寺前此名樹と  
眺めあつらん

今より日づく世に花柳さく

魚亮

一日後あつらん春の語り

妙、あつらんといふの細かなる  
よつらんといふの細かなる

三三

あつらんといふの細かなる

魚亮

西行系の花

あつらんといふの細かなる

余中

三

あつらんといふの細かなる

今より一ヶ月に世は花柳さくら

魚亮

一日後宮より春日の詠

妙、おとあふしし道々若みそ道

三

よさくらに梅さくらさくら

三

西行系の花

西行系の花

魚亮

さくらに梅さくらさくら

余中

三

さくらに梅さくらさくら

山中小止岩

敬

三

朝夜よのちの

北山家

定屋魚拾十月 物故追悼

向井 潤 礎

夜のさくらに梅さくら

誄意 誰と好む別

村 伝

さくらに梅さくらさくら

誄意 誰と好む別

誄意 誰と好む別

さくらに梅さくらさくら

十月 追悼

三

さくらに梅さくらさくら

和歌 半臂の袂合

侍

古今集の

○さう雄乃る楓

村任

北女奥母之波と云思ふ方より

此句の文或も詠云花ハ桂無より

あまの妻より傑より一句成る石女

志り雄女歌いし言曰る辰ハ秋也

去衣曳浪霞浪霞應濕ト云、又

方葉多ハ霞天河河爾爾侍君

登伊住還程尔尔裳裳禰禰所沾

後りも多し作例ハ物とん

本ら情高や生ぬる花乃る平

予ハ家まも立向非ハ靡もん

二重ハ情ハ以外系情ハ大

○十月十日冬至の日古齡の翁

玉玉ハハもるハお加美

軒軒也也牡蛎牡蛎

初五ハ千年松

万々年松ハ玉葉ハ石誤ても目出度

尺也ハハの麦母陽色芽割て

とつキと執ひの外ハ詞書あり畧之

長英之ハハハハハハハハハハハ

赤子 思を込

○由平持吟 但自画アリ

益羅一荷荷榻榻床床 北平畠ハ

老老ハ田田子子 鉄鉄めてハ平

平平ハハハハハハハハハハハ



凡ゆるの麦母陽色芳劇て  
村任

長英と人いんくくまよふ  
詞書あり畧之

香子 思を

○由平拈吟 但自画アリ

籬維一荷 榻床 北平畠  
老の田子 鉄めて  
そりし 北

茶のりて見れら 籬維あり

松のれ 誰と 上葉ん 桶と  
カゴみ 物

一馬ハ 榻と ちりて 行空

一馬の一行とれ

秋の 櫻乃 青まて ちねん

秋風 虫月 身入 之 鳴め  
ちりて ちりて ちりて  
も 鳴る 幸 常と 合

籬維 カタニト 訓ス 俗ニカゴニ

あて 中と 前と 身 ね ね  
當世ハ ちりて 熟と ちりて  
身と ちりて ちりて 中平ハ 流石  
古実し ちりて 此と ちりて 拈 籠り  
感慨 ちりて

老矣 村任 列

右由平一軸ハ 吐 月と 人の 家藏

○御仕復れ其首帯はおあり人くも御用  
下は九酣千乃し見本ありの誅句は  
みく各く守如美子の志くも追ひ  
せよとる小固辞しはあて行はぬ

お遊く一府上め亭主山峯乃松 村住

庚子正月十六日斤山先生に

轉居し習え

又休之白く玉 延

○雪の物も物も雪に  
あはれ哉

外一句の初め後留

雪は且しこの雪の深さ  
雪は呼ばるる物しはの六乃木  
村住

○後迎傳藏と人、始らざる早

嘉辰今月より此のるん

極はつてゆく家督は

代く子名は婿の調ひ

鶴の齡龜は馬代とてり

行はぬとて思ふ

五

本具はもや陰陽の行待く厨と統

画ハ之方、契斗玉、文法

○月夜はく先てよるあまの

公風

新のいしおとくは黒く茶碗

侍く子名姫夕姻調ひ  
能の齡危れ馬代とてり  
行くも世は思ふ

本日女も也淫陽の行詩く厨と統

画ハコ方、奠斗玉、文法

此、皇女也

○月夜歌、先て、よみあはせしめ、  
公風

新、月、あ、い、く、ま、く、と、と、  
皇、女、御、歌

○殿中、女、深、音

淫、燈

小表、を、わ、う、い、く、も、も、  
之、つ、花

清、酒、十、回

風、や、松、う、一、穿、染、入、鐘、の、敷

お、涼、一、系、わ、く、ら、け、  
鱈、乃、海

○因常立、守、女、御、歌、言、且、と、も、  
や、大、馬、舞、の、  
足、さ、い、な、一、女、表、を、端、て、と、  
自、あ、り、御、歌、  
と、て、涼、の、小、甘、く、い、い、  
も、を、に、あ、り、  
但、千、楊、鈴、を、舞、小、乘、り、  
も、又、つ、り、  
何、ら、は、思、ふ、  
山

七、月、何、事、も、あ、い、り、  
か、美、松、乃、花、  
山

○淫、燈、子、の、念、命、  
び、旋、歌、句、と、  
歌、

花、芽、く、く、  
乙、此、行、  
や、付、の、り、  
あ、り、

右、一、行、物、  
香、筆、し、  
く、  
外、古、今、  
集、書、  
下、  
女、の、  
反、古、  
歌、

古歌

何心おもしろい山乃鶴也月

此の意の方と云ふは、  
だま、おもしろい、  
或は、  
或は、  
或は、

○春夜

村住

東風東足、山乃鶴也月

○菜花

菜乃花、種く、誘子、  
斗白、菜乃、注、  
子乃、先、  
○鬼更自画、郭公、  
自画、  
二十余年、  
今、  
半、  
稀、  
○歳、  
酒、  
中、  
此、  
除、  
日、  
胡、  
は、  
ん、  
後、  
西、  
十、  
旋、  
は、

立

○鬼更自画、郭公、  
自画、  
二十余年、  
今、  
半、  
稀、  
○歳、  
酒、  
中、  
此、  
除、

啼、  
二十余年、  
今、  
半、  
稀、  
○歳、  
酒、  
中、  
此、  
除、

村住

多川

乐

○歳、  
酒、  
中、  
此、  
除、

日、  
胡、

菴十

十、  
旋、  
は、

穠小舟の... 舟中... 舟中... 舟中...

歳々...

舟中

蓮花... 舟中... 舟中... 舟中...

此の留能る... 舟中... 舟中... 舟中...

昨日... 胡蝶も... 舟中... 舟中...

菴十

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

去息

去柏

舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

去亮

舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

去角

大運乃... 舟中... 舟中... 舟中...

去柏

去亮

舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

舟中

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

舟中... 舟中... 舟中... 舟中...

去

去

<sup>茶臼</sup>  
つらとれを藤を跡す 柳 哉 春柏

去興

<sup>五</sup>  
梅が中定て死し uring の、  
此の留奈と押字をくく叶あり  
と東よして中この留上の遠月と知

歳旦の紙白々  
若柏

春の月夕夜のありし 花あり  
此之に至る能留る 花程にて留  
おと曲はれおとれ 拓子并こしら  
曲のりらてあめ ち振りのあり  
りれら物しらりれ 夜念...

芥子句

竹保娘の色所程冊らての  
此之の陰ましれよ一の

白ハせて葉付酒樽し  
此をこい上云、さるそく白

<sup>茶臼</sup>  
月2字部しをよんて  
やよれや月りつをさく  
けまの重のもつれさく  
根もれしあし

○遊々々

村怪

脊ねわあわを穿入  
上やそらわを穿入  
や舟らわ留もろ婦

音仙名ウラのおお  
○六根法澤らと

此等の上巻の  
中にもあり

此等の上巻の月と云ふは  
貞徳月と字部してあり  
やよれば月と云ふは  
けり  
村佐

○道々々々

村佐

君のわがわが  
上やとら  
や舟ら

○六根法淨

真柏

此白石韻なり  
徳信入り  
残念

此歳旦

三

川童

○上京

帆わたる

連文

此等の上巻

感心

此等の上巻

村後

引致の事... 村後

公坊

○ 庚子... 村後

正字

○ 庚子... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

○ 庚子の卯... 村後

○ 庚子の卯... 村後

村後

○ 庚子五月十九日... 村後

○ 庚子五月十九日... 村後

村後

○ 五月の末... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

大希庵

○ 庚子の卯... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

村後

○ 庚子の卯... 村後

○ 庚子の卯... 村後

○ 庚子の卯... 村後



附し... 大希庵

○<sup>庚子</sup>六<sup>日</sup>の春中... 法名義善意専仁達居士

曙... 欽也

○... 花...

村徑

朝... 何...

右... 一字...

○連歌... 里村昌桂舎弟、詔碩庚子

五月 詔碩 追悼 白 里村 昌桂

昔... 枝... 葉...

時... 果... 世... 林...

右二句村上文章... 詔碩の追悼... 村...

○至... 地... 詔...

詔...

尺... 詔...

砂中... 詔...

色... 詔...

○牧童牛女持鏡此画の扇面に讀ス

取次は無之

少くもは私し

きよく好む者

是後

君才女とりし舞ひ心星女は田

口の前画ハ元鶴二羽舞女子  
ありねと少ありしは不替なり

老人の品年しき事心強陽の佳

立

○を暑 去後を倦

山姥の聲さの世乃ありてふ

立

○年能むらち中勢つゝあり

ツ直や此後生しは不替 昔流

立

石の文し廿余年其之景所

定しやふとどあり

七ツ 稀齡のや長し倦

立

もり少くも年ありしは不替

敏性

深きありしは不替し今年

物

ツギもや此後生かぬか  
石の文に廿余年其子孫所  
家しむるに似ぬ

七ツ 稀齡のや長江俵

十才

もしり少の早舟の心  
深なる心さう海に今年

。初姦

色姦

月あはけの昔は舞あはる心

古歌の月あはけは  
あはけの古歌の月あはけは  
あはけの古歌の月あはけは

。天中如金

心初は夢の心は

全

。京沙蕪村の秀逸ハ

心身人か力なき心は

。八初の東嶺とてて一弃也

躍り子うりなき心は

色姦

麒麟

麟 仁獸 鬣身牛尾 一ツノ 角 角ノ上有肉  
不食生物 不踐生 以早 王者有道  
則麟出 毛虫三百六十内 麟為之 長  
四靈一也

麟 鳳 龜 龍

又出禮運 白虎  
并て有 五靈

右之外春秋左氏傳に及る也

八朝

夷柏

吟うへくそ物 姑さく 花乃春

稔とんじ 楊梅 重さ 朝日御一掃

以菊

花妙如神 花乃 関

以人

花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関  
花の聖菊 花乃 関

古事から伝へるに及る 志相

古事から伝へるに及る 志相

古事から伝へるに及る 志相

古事から伝へるに及る 志相

きりぎりす 秋雜林の長谷川  
原氏物語より出づる 長伯の歌の著述と  
引合はしむ

古事から拾へば 長谷川志保の

きりぎりす 秋雜林の長谷川

原氏物語より出づる 長伯の歌の著述と

引合はしむ

○古知て

色紙

かきつばたの 花は 秋の 長谷川

○ 雲跡庵志、黄色 付の

かきつばたの 花は 秋の 長谷川

引合はしむ

○ 今や 庚子は 亥春、 則ち 且女あり

吾人の 御方の 十二支も 子も 不い

中しと 年ぬ 之甚れ 子ぬ 向ふ あり

芽ぬ 秋春 社と 重ぬ びおの つゝ 子日

の 松れ 幾力 氣強ぬ あり 仰が 笑し

御酒 一杯 存る こと 思ふ 捧 愚 詠の

徳集八十二冊

謹書

右之技合の事 僕も形も 需辭一々 依  
友平評し 竹の事ふたり

口人向 非人倫 人らと云ふも 世人の行  
ちむあり 人らと云ふ人とは 云ふと云ふ  
しつこく さらさら 妙 情補 伝衣 子も  
流俗 人向 こと 人界 下り こと  
かて 人す こと 舟 行 義 こと  
民間 こと こと こと 同 字 こと こと  
魚 こと こと 人 こと こと こと 非 人 倫  
人 こと こと 人 倫 こと

口山笑 春季 用 出 事  
春山如笑 夏山如滴 秋山如粧  
冬山如眠 こと こと こと

一 鶏頭花 七 坂 吉 吉 吉  
はら こと こと こと こと こと こと こと こと  
はら こと こと こと こと こと こと こと こと  
はら こと こと こと こと こと こと こと こと  
はら こと こと こと こと こと こと こと こと

高ハリ こと こと こと こと こと こと こと こと

月 こと こと こと こと こと こと こと こと

こと こと こと こと こと こと こと こと

家...  
年...  
大...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

高ハリ...  
...

我...  
...

...  
...

...  
...

一諸葛孔明兵法...  
...

富...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

示乃金  
村徑

竹...  
...

○ 相濟社... 和文... 押

歌... 仙... 毎... 一休和尚... 戯の...

わ... 小... 常... 侍...

約々村みち

引... 乃小君...

○ 訶黎勒... 右... して... 後...



音カ  
得し日女方重湯中一今也

約七村みち

引の女... 兼乃小君... 也

。訶黎勒カリコシ... 河意得花乃友

右鳥... の... 理... 二ヨリ... 也

訶利勒ハ河系カ製衣... 文字ハ  
吾報北後名書...

黎レイ... 訓

訶カ... シカルセムルイサフ  
大言テ而怒...  
靴カシ... エルホル... キサム  
呼馬靴... 為傳...

コヤ... 也ハ

... 人... 其... 人... 花... 也

年中

山

兼乃花... 乃... 道

之穠

十南

識りたてはたか  
いしきりたか  
いしきりたか

夕陽

五

不<sub>レ</sub>くはたか  
いしきりたか  
いしきりたか

夕陽

五

落<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

五

新<sub>レ</sub>ひたか  
いしきりたか  
いしきりたか

夕陽

五

守<sub>レ</sub>りたか  
いしきりたか  
いしきりたか

夕陽

五

和<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

且<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>誅<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

枋<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

人<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

あ<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

いしきりたか

伊勢

年<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

あ<sub>レ</sub>たか  
いしきりたか  
いしきりたか

順徳院



十三夜

雲が散る〜 雀の聲も 後乃月一掃

一瀬は小川 鴨川ノ水

川の流れて川が静かになる  
その時 鴨川ノ水  
後乃月一掃

長明寺

石川がせき小川が流れては  
月も流れては

石川文山翁の梅子菓子  
と時 鴨川ノ水

流れてはせき小川が流れては  
と流れては

中橋 鴨川ノ水

流れてはせき小川が流れては

鴨川ノ水



雜記

Handwritten text in vertical columns, partially visible on the right edge of the page. The characters are in a cursive or semi-cursive style, typical of traditional Chinese calligraphy.

